

末でした。

一日も早く故郷に帰りたい思いがりましたが、浦賀で一週間足止め、検疫がようやくパスして上陸、故国の土を踏むことができました。

懐かしのわが家に帰ると母は昭和十九年に脳卒中で亡くなっていました。昭和十八年七月、初年兵受領で内地に帰った時に会えたことが良かったと思えました。

弟は昭和十八年現役入隊、満州の泉兵団に入りましたが、その後ルソン島で米軍と戦い戦死しました。

姉二人はそれぞれ嫁いでおりました。終戦後は父の手伝いで農業をやっていましたが、父も亡くなり、現在は私夫婦と娘に婿養子を取り、孫が男ばかり三人と孫の嫁とで合計八人の大家族で暮らしています。

幸い婿養子が島田材木店を経営し、檜の官材専門として順調に業績を伸ばし、全国的な取引先があり有難い事と感謝しております。

私の軍隊生活の思い出

埼玉県 小屋 喜重

私は昭和十七（一九四二）年十二月十五日、千葉県佐倉市東部第六十四部隊に現役兵として入隊、翌年一月四日、勇躍第一線の中支派遣軍峰兵団独立混成第十七旅団独立歩兵第八十八大隊に配属され、この地で初年兵の教育が始められた。ここは長安という街で、部隊は鉄道警備が主任務である。約六カ月間の初年兵教育後、第一期の検閲も終わり、いよいよ湖南殲滅^{せんめつ}作戦に参加することになった。

初めての戦争参加であり、実戦の経験のない自分たちには、ただ分隊長あるいは古参兵の指揮の言われるままに行動するのみである。私たち初年兵のほとんどは関東地方出身者で、体力も頑健ではなかったためか、初年兵の二分の一は病気になってしまったが、幸い自分は病気にもならず、その後幹部候補生教育を受

けたため、江南常德作戦には参加しなかった。

幹部候補生の教育も終わり、乙種幹部候補生となり、部隊に復帰した。階級も伍長となり班長と呼ばれるようになり、何となくきききした気分もあった。

荻港から桃沖というところまでは、蛍石という鉱石を運ぶために造られた鉄道である。その距離は約十キロくらいで、鉱山トロッコ鉄道での警備が主たる任務であった。

常德作戦はまだ行われていた。自分たちは鉄鉱山分哨には一週間交代で勤務していた。七、八人の分隊長として山の上で過ごすわけだが、夜は一人で二時間の立哨をして交代した。することもないから、よく夜空を眺めては、星の位置の移動状況とか、流れ星などに関心を向けていた。

山の下の方から時々銃声が聞こえるが、それは国府軍と新四軍の内戦の一部であり、日本軍は関係なしという、まことに変わった警備地域であった。この分哨には残飯をあさりに来たヒョウを射止めたこと、そしてそのヒョウの肉のうまかったことが一番印象に残っ

ている。年の暮れ荻港の上流五十キロぐらいの所に銅陵という町があるが、そこまで行軍して大晦日に到着した。銅陵までは上海、南京、無湖を通って鉄道が通じている。その当時、鉄道はあったが、そこまで自分たちは夜を徹して歩いた。

銅陵に移動しても分哨勤務は私たちの主たる任務であった。分哨は、駐屯している兵舎から近いから二十四時間か十二時間のどちらかの勤務で交代していた。ここでの分哨勤務中二、三〇〇メートル離れた山の上でイノシシが現われるのを見つけて、小銃を撃つのがなかなか当たらない。銃が悪いのか腕が悪いのか、皆でガヤガヤ言いあったものだ。

話は前に戻るが、湖南殲滅作戦の時の事である。行軍中小休止、昼食の命にて各分隊はそれぞれ飯ごう炊さんにて昼食の準備に入った。その時初年兵の岡野一等兵が谷川へ下りていったまま戻ってこない。分隊の皆がどうしたのかと岡野の下りていった谷川まで行って、いくら呼んでも応答がなく、周辺をくまなく捜し

たけれど遂に見つからなかった。敵中なのだから捕殺されたのなら死体があるはず、分隊全員は飯も食わずに大声で呼びあつたが、とうとう行方不明のまま出発してしまつた。

岡野はどうしたのだろうか、逃亡したのか、それとも水汲み中に後ろから捕らえられて捕虜になつてしまつたのか。分隊長、いや、中隊長以下全員が彼のことを心配したが、あれほど捜しても見つからなかつたのだから諦めるしかない、とそのまま時は過ぎた。

その後、自分たちは湘桂作戦（ト号作戦）に参加のため昭和十九年五月二十二日、青石碑陽動戦に参加した。

第二十三軍は北江に沿う地区に攻勢をとつて重慶軍第七戦区を牽制し、第十一軍の衡陽付近における作戦を容易にすると共に、その後の作戦を準備するため第一期作戦を行った。攻勢開始は昭和十九年六月二十七日であつた。第百四師団はこの作戦の主力となつて、北江沿岸の敵を攻撃した。独立混成第二十二師団は広東南方約六十キロの江門付近に集結し、新会、台

山方面の敵を攻撃した。大きな戦闘もなく敵の抵抗も少なかつたが、第百四師団の将兵は折りからの雨期の増水に難渋しながら、第二飛行団の直接協力を得て清遠（広東西北約七〇キロ）北方の有力な敵を敗走せしめた。

我等部隊主力は、粵漢線打通のため長沙、衡陽、桂林の進攻を企図するもので、中支南支の精鋭部隊を選びすぐり、一大決戦を中国軍と交える緊禪一番の作戦であつた。我が部隊も陽動として主力をもつて石首北方の敵陣地に攻撃をかけることになつた。万そう警備隊にある事四十日、五月二十七日、分隊は尖兵分隊として勇躍一番死地におもむくことになつた。

尖兵とは各小隊の先頭を行く。路上斥候は経験豊かにして判断の明瞭な者でなければ務まらない。路上斥候を行う前には、討伐などでは、中国人の密偵を放つて敵情を探らせるのが普通であるが、この度の戦闘は即敵陣であるので密偵は必要ない。路上斥候は古参兵二人が当たることになつた。

木に囲まれた部落を過ぎると水田の中に一本道が通

り堤防につながっていた。堤防までの距離は約三〇〇メートル、水田の中程まで行進し、尖兵小隊が部落を出離れた時、堤防の陰から銃撃を受ける。弾丸雨飛、田んぼの中に身を伏せる。チェッコ一挺を持った十二、三人の兵力であろう。分隊の小倉、金井が受傷する。何分ほど経過しただろうか、堤防で爆発が起くる。擲弾筒の援護射撃が始まった。

日本軍の擲弾筒は中国軍の迫撃砲と同じように弧を描いて落下するので威力がある。五〇ミリくらいの弾丸で発射筒は長さ四〇センチほど、一個小隊のうち一個分隊が擲弾筒班である。爆発がすさまじいので威力がある。たちまち敵陣は撤退、敵は百弓嘴という名もない村落に堅固な陣地を構築していることが分かった。周囲をクリークで囲み要所は鹿柴と杭をびっしり植え、かつトーチカである。その晩は、付近に野営し部隊は三方より攻撃をかけることになった。まず古参兵が尖兵で攻撃することになったが最前線であることはいうまでもない。

夜出発、星明かりを頼りにのろのろと進む。やがて

白々と夜が明けてきた。敵陣地が見えると、敵兵がトーチカの上にいる。距離二〇〇メートルぐらいであろうか、一軒家があった。路上斥候に出た三年兵の佐藤上等兵が家の角より覗いた。途端に炸裂音が起こり、彼は五体バラバラになり降ってきた。地雷に接触したのである。しかし最初は地雷とは知らなかった。砲の直撃を食ったとばかり思った。すさまじい敵の射撃が起こったのはその直後であった。

我々は麦畑に伏せたまま。堤防ではまた炸裂音がして手足がバラバラ降ってきた。多田伍長である。「地雷に気をつける」と後ろから指令が飛んだので初めて地雷だと分かった。地雷への恐怖が一瞬に襲ってきた。地雷は兵隊が踏みそうなところに伏せてある。佐藤上等兵の爆死したのは一軒家の角であり、多田伍長がやられたのは堤防の凹みであった。

麦畑から少しでも頭をもち上げるとバリバリッと弾が飛んでくる。用便すら立つてはできないので寝たままである。周囲にドカンドカンと大砲の弾が落下してきた。生きてる気がしない。後で聞いたら味方の連隊

砲が距離を間違えたらしい。目の前で同年兵の奥富上等兵がやられた。彼は軽機の射手であつたが、頭を撃ち抜かれて即死である。中国軍の中には狙撃手として射撃の名手が軽機の射手を狙ってくる。そして敵陣地とは別方向に位置しているので、どこから撃ってくるのか分からない。これが彼らの攻撃作戦である。その他けが人も大分出ているらしい。

「前に出る！」と伝声が来るが動けるものでない。その中連隊砲が敵陣に落下し出した。我々は麦畑に伏せたままだ。しかし、トーチカを破壊することができない。チェッコ機銃は我々の動くのを待ちかまえているからである。「城は四方から攻めるな」という名言がある。三方から攻め一方は逃げ口を空けとけという意味である。正にその通り第一中隊は東側正面、第三中隊は南側、第四中隊は北側からと攻撃をかけたがびくともしない。

二時間経ち、三時間経ち、時間は経過するばかり。畑の中にもう何時間伏せていたであろうか。小便がよく出る。黒い大地は乾く間もない。麦の穂首がバラバ

ラ落ちている。穂首だけがなくなった麦がいやに目につく。

がっぷり四つに組んだままの状態を破つたのは作業隊であつた。作業隊は盲点であるクリークの水際を通り、鹿柴を排除し、遂に突撃に成功した。敵は西側の堤防をどンドン逃げていゝらしい。我々もおっかなびっくり堤防を前進。前など見もしない。足跡の上に自分の軍靴を乗せて歩くのである。なにしろ人が空中分解するのを二度も見ていたので恐怖心が先に立つ。部落に入ったのは午後であつたらうか。トーチカの中にはまだ敵兵の姿があつた。たぶん負傷して逃げるこゝとができなかつた者達であらう。やがて夕暮れ時となり、家をこわし、壮大なかり火が周辺を赤々と照らし、どの兵隊も興奮気味であつた。

前夜ろくに寝なかつたにもかかわらず、昼間の戦闘の惨烈さが脳裏にこびりついて離れなかつた。天空高く舞い上がった人体の空中分解を二度も見せつけられ、かつ軽機射手の奥富上等兵が目の前で頭を撃ち抜かれて戦死したので無理もない。人馬がごつたがえし

た狭い百弓嘴の部落は夜が更けても話し声が続いた。

各分隊は戦闘後の「異常の有無点検」ということで、この時の我々の犠牲者は結局戦死者八人、負傷者二十人ぐらいであった。この中には自分も地雷炸裂の時砂塵と共に破片で左耳を負傷、血だらけの顔にて戦闘の終わるまでどうすることもできなかった。敵の退却と共に負傷者は部落の中で手当を受け、足をやられた者たちは戸板に乗せられ、歩ける者はしばらく後方まで歩いて軍のトラックに乗り、初めは漢口の野戦病院に、次に南京、徐州の野戦病院へと転送されて治療してもらった。

自分は難聴になったため、昭和十九年十二月に原隊復帰となり、旅団司令部に転属となる。

戦い利にあらず遂に翌二十年八月十五日終戦の詔書が下賜され、我々は雲溪という所に集結、ここで武装解除をし、今後の指示を待つこととなった。

私たちはソ連抑留者のような過酷な重労働等強いられることもなく、特に食糧なども不自由のない抑留生

活であった。たまには中国人は野球が好きで一緒に楽しんだことなど懐かしく思い浮かんでくる。

そんなある日、前記に戻るが湖南殲滅作戦の折、飯ごう炊さんにて一人で谷川へ水汲みに行ったまま行方不明になった岡野一等兵が、中国兵として中国服を着ていたので、その時は分からなかったし、本人も「自分は岡野です」とは名乗れなかったようだ。

後で帰還後、戦友会の折り、彼の口から事実が話され分かったのだが、谷川に下りていたら、そこで中国兵数人に拉致され、捕虜になってしまったという。

このようなケースで拉致された日本兵は二、三百人はいたという。しかし戦後日本に送還される際は、捕虜生活中に着用していた中国服を日本の軍服に着替えさせて帰還させてくれた中国側の心づかいに対し、心から感謝の気持ちでした、と彼は話してくれた事が忘れられない。